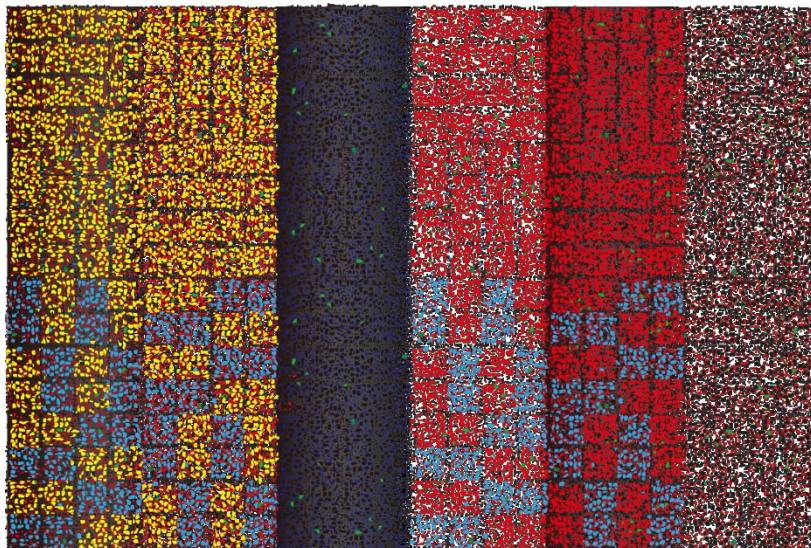


詩誌 立彩

*Rissai: A Journal of Poems*



第 19 号  
2021 年 3 月



目次

関根 全宏

おわること 2

死者の肖像 3

青さの中に 4

そして今ぼくは死について 6

相澤 ゆかり

詩と人生 8

鎮魂歌など書けません 11

伊東 友乃

乙女のぶぶん詩 16

そのあとは 18

東野 潤

私たちは海に戻りたい 22

渡辺 信二

新秋津駅にて 24

田中 はじめ

貨幣論 26

スマホを捨てよ 28

運命論 30

表紙原画 鈴木 順三

「共振1」(表紙)

「共振2」(裏表紙)

おわること

関根 全宏

ひとつの世界を  
おわらせること

命が

おわること

続いていたことが  
そこでおしまいになる  
おわりになる

はじめのために  
それでも世界は  
続いていく

## 死者の肖像

関根 全宏

ぼくは今日も死者たちと眠る

一日中彼らと

他愛もないことをおしゃべりしたから

きつと

ぐっすり眠れるだろう

明日の朝の濃いコーヒーが

待ち遠しい

青さの中に

関根 全宏

火葬場の煙突から

煙があがっている

うっすらと曲線を描き

水に溶け入る糸のように

ほどけ

漂っている

その空は

いつもきまってる

青く

眩しく

ぼくはやけに

清々しい気分で

遠くを見ていた

そこに何かの答えが

あるわけではない

ただ

青さの中に

消えゆく跡が

残っているだけだった

そして今ぼくは死について

関根 全宏

事物はゆつくりと曲線を描きながら

視界から消えていく。あとには

その曲線だけが

残っている。

——リチャード・ブローティガン

手に入れるということは

失うことだと知った

もう二度と 戻ることはいできない

それ以前の自分にも

そうやって何かを切り捨て

またひとつ 失ったものをつみ重ねていく

そして今ぼくは死について



考えていた

ほんの一瞬だけどね

一九九七年七月六日

きみが死んだ日

ぼくが灰になった日

## 詩と人生

——古稀を待たずに去った人へ

相澤 ゆかり

「いい詩を読めばいい詩が書ける」

そう教えてくれたのは

中学の阿部先生だった

家庭科の先生だったけど

「だって 美味しい料理を作るには

まずその前に 美味しい料理を食べなきゃ、でしょ？」

料理実習の時間 彼女は

「詩を書いている人はいますか？」

と言いながらクラスを見回した

右手に揚げ箸 左手にフライパンを握っていた

「作るってね 楽しいわよ

あなたたちもね 何か作ってみるといいわ」

そう言って微笑んだ彼女の顔を忘れることができない  
わたしたちはみな男子も女子も エプロン姿だった  
実は どうしてあの時 詩の話になったのか  
前後の脈絡を全く覚えていない  
だから 今となっては 作るのが楽しいと言ったのは  
詩のことなのか料理なのか 記憶が曖昧なのだ  
ただ いつものように 「四季」が  
小さくBGMで流れていたと思う

あれからもう二五年経つ

彼女は教員として三八年

妻として四四年

母として四〇年

祖母として九年

本当は 来年が彼女の古稀のはずだった

去年 一冊の詩集を出したが

そこには 十八歳の時の作品もあるので  
五〇年間 詩人であったのだ

彼女は この世の一隅に  
そっと詩集を残して去って行った

あの去り方が わたしたちに何かを教える  
いい詩を読めばいい詩が書けるように  
いい人生を見れば  
いい人生が送れるのなら

鎮魂歌など書けません

相澤 ゆかり

あなたはもういないのですか

わたしは 化粧もせずに

仏壇でいつも そう呟いている

たしかに あなたがいなければ

わたしだって たとえ今日が

あなたの誕生日だとしても

わたしたちが ささやかなケーキにささやかな炎を点して

ありきたりの祝福を かけがえの無い言葉として

心と心で交わし合うことなど もう できません

靈魂があるとしても

それは 心の棲む場所と全く次元が違うから

心と靈魂の混じり合うことはない

わたしにもたぶん 靈魂があつて

あなたがいないとしても

今日が わたしの誕生日だとすれば

きつと わたしたちは

靈魂のレベルで再会できるかもしれない

せめて 指切りくらいはできたかもしれない

だけど わたしはじぶんの靈魂を知らない

あなたとはもう いっしょになれず

ベッドのシーツを共にしわしわにすることもできない

ああ そんなに向こうは

居心地の良い世界なのでしょうか

もう 何の連絡もくれなくて

わたしは 冷たい足をじぶんで抱えて

なかなか寝付けない

身体って なんと不自由なのでしょう

「たくさん寝ておけばね

永眠する時間を減らせるからね」

「えっ」

「つまり、長生きできるからね」

「ふふん 変なの」

いなくなるまで 大学院生のような

夜更かしの生活を続けていたあなた

そんなに仕事を楽しかったのでしょうか

いくら いい仕事をして

それは 砂浜につけた足跡のように

波が来くれば すぐに 真砂に埋もれてしまう

長生きを望むだなんて

亡くなった子どもに申し訳立たないですが

あなたがいてくれたなら

今日が あの子の誕生日だから

きつと わたしたちはお互い 涙を隠しながら

死んだ子の年を数えているでしょう

それとも あなたは むこうで

あっちゃんを抱いて あやしているのでしょうか

きつとあの子は あれ以上 歳をとっていないし

身体も大きくなっていませんよね

だから 伝えておきたい

もう 機会が無いかもしれないので

あなたのなかの少年へ

既に消え去りながら いつも立ち返る姿

そこに見るのは

海辺に立ち 空を掴み

風の向こうを見抜こうとする意志

空しくも この世の全てを投げ打って

わたしたちのために じぶんを捧げてくれたこと

わたし あなたがいなくなれば

きっとたくさんの詩が生まれるだろう

などと不謹慎なことを考えていた

その罰があたったのか

詩など書けない

書けません

とりわけ 鎮魂なんて 到底 無理です



けれど でも これだけは

知っておいてほしい

あなたが わたしの詩でした

そうでした

そして これからもずっと

あなたがわたしの詩であることを

乙女のぶぶん詩

伊東友乃

その1

揺れ続けて 泣き続けて

どこかに落としてきたものたちは 今朝息をふきかえして  
光のなか

待っているのは あなたの横で 耳をそばだてているのも あなたの横で  
けつきよく どうすることもできないまま あなたの横で  
なぜ

言いわすれたの

その2

校舎の匂いはふるくて　いつも黄色の蝶がどこかで飛んで  
待ってても

誘われず　近づかず

たまには

思いつきり　返事をしたい

蝶は飛びちるだろう　あの中庭で

羽は風にのって　屋上へ登って

黄色はひかりになって

気持ちよく　融合をはじめて

それは　そう　最高の返事　ひとつで

そのあとは

伊東  
友乃

上体をあげて

うしろを見れば

しっぽがついてくる

はず

隣り合わせだった

獣たちと争って

その時点では まだ

光も音もわからない世界

自力で取りあげた

映像に

色はついていなかった

それから

島と

年号とは

呼び起こしてくれる

動物が

日常を 体験するとき

その体験は

濃縮され

一滴のミルクのように

わからなければ

生きていけない

はずが

銀河同士はどんどん離れて

量で説明するより  
端をつかんで  
引き寄せたい

埋められてしまった  
人々は

放浪しつくして

さいごには

肉をあぶったり

蒸し焼きを知った

そのあと

は

誰も知らない

記憶の

たわみ が

重ね合わせとして  
薄い膜をかぶせる

生きるうえで

加速度が

ほしいのに

細かい屑をのぞき

過去の

最初のかたちと位置を戻すばかり

受け止める構えをかためたまま

水平方向の からだの伸びは

島のむこうの

空へ

私たちは海に戻りたい

東野 潤

私は静かでした

海辺の砂を仲間としながら

私と仲間の上を 波が行き来している

その永遠を感じているだけでした

けれども 春うらら 誰もが

海辺の散歩に誘われる頃

知らない人が 大きな黒い手で

私たちを掬って 遠くへ運んでいきました

それは 何か見えざる手の仕業です

それは 決して 私たちの望みでも

救いでもありません



私たちは 今 タワーマンシヨンの基礎となり  
味もなく 湿り気もなく  
これからの一生を終えるのでしょうか

呪うのは嫌ですけれど

でも 心から思う

このマンシヨンは 崩壊し

私たち 再び 海辺に戻りたい

新秋津駅にて

渡辺 信二

ホームを白杖で叩きながら

男が階段へ向かう

その姿は 周囲の流れを制御する

確かな歩みである

それは 移動する中心であり

今 白杖で階段を叩き

今 一歩一歩 上る

確信に溢れ 力が漲る

目的地へ向かうというより

既に目的地に到着しているかのようだ

人びとは 男の動きを 見て見ぬふりをしたが

まるで 男に付き従って歩いているかのようだった

この男こそ 混乱の中

一条の光となつて

おれたちの進むべき道を教えてくれたのかもしれない

今日も乗り換えの途中 おれたち

ビールを片手に 唐揚げを頼張り

帰宅を急ぐ人びとを ぼんやりと窓越しに見る

彼の姿を見なくなつて もう何年が経つだろう

おれたちはなお 目的地を知らず

それこそ盲目に ビールをもう一杯 煽る

## 貨幣論

田中 はじめ

貨幣は そもそも 虚構であった

貝殻や金属を崇めた時代から

紙束を積み上げる競争時代を経て

今はスマホの画面上で 数字の桁数を競い始める

貨幣は そもそも 想像であった

いや 仮想であり 仮装でもあるから

人の思いで いくらでも姿を変える

邪な欲望に身を任せ ブランドを纏い

タワマンに住み 喜びに打ち震える

恋愛や結婚 収奪 さらに 犯罪の対象である

じぶんたちの卑しき小ささ

あるいは暴れる力さえも喜びとする  
しかも その醜さに気づかない

多くの人間たちは 今なお

貨幣を神と思い込み マモンを崇める  
だが もしも 貨幣よ

おまえがほんとうに神であるなら

ノアに代わって祈る

滅ぼせ 仮想な人びとを

一人残らず滅ぼせ と

スマホを捨てよ

田中 はじめ

かつてシーザーが生きていた間に

呼吸した息の量は

総量どれほどであり

そのうちのどれほどが 今も この地上に漂っているのだろうか

空気は不滅か

いや シーザーじゃない

私が知りたいのは シーザーでもイエスでもなくて

仏陀のことです

仏陀の呼吸吸気のことでした

彼の吐いた息の せめて 1ccでも吸い込めば

悟りが開かれるのだろう

そうです 1ccでも吸い込みたくて

例えば 山に登るのです

——ほんとうに悟りたいのか

喜捨もできず

修業できず

山伏になれず

実はただ うちにおいて ウェブサーフィンしながら

画面に息を吐くだけなのに おまえ

おまえは ほんとうに悟りたいのか

チベットに行け

ガンダーラへ行け

せめては 托鉢に行け

いや まずは スマホを捨てよ

## 運命論

田中 はじめ

運命に良し悪しはない

全ては じぶんの選択なのだから

このご愁傷な敗北感を

いかに処理しよう

夜道を歩き回りながら

あいつらの顔を思い浮かべる

あの時 ああしていれば と悔やまれる

明日の祝日には ドライブで一掃しようか

いっそ 今 ケリをつけようか

久しぶりに 星を仰ぐと

手招きするように

命を誘うように



星は ぼくを祝福している

そうなのだ いっそ 今

祝日気分にも浸ってもいいのだ

今夜は 金に糸目はつけない

いや 少女たちの笑い声を聞くのは楽しい

理由はなんであれ

笑い声はいいことだ

ええ これが ぼくの戦いでした

精一杯の 力一杯の

だけど 微笑むのは 無関係な少女たちだけ

そもそも 少女たちって言い方

時代遅れのセクハラっぽいから

運命は無意味には微笑まない

掴み取ろうとして 虚しく

星に手を伸ばすけれど

抱むのは 空だけだ

振り上げれば 影がぼくに打ちかかる  
何の哀れみも容赦もなくて

1年延期されていた「インタビュン展 Vol. 2」開催のお知らせ



2013年3月発行の『立彩』特別号以来、表紙のデザインを手がけてくださっている鈴木順三氏が、来たる4月6日13時から、11日16時まで、練馬区立美術館区民ギャラリー（東京都練馬区貫井1-36-16：最寄駅西武池袋線中村橋駅より徒歩3分）にて「インタビュン展 Vol. 2」を開催します。『立彩』も展示される予定です。お問い合わせの上、ご来場ください。

2020,09,01以降に贈られた詩誌

- 『りんごの木』56号。
- 『白亜紀』158, 159号。
- 『万河・Banga』24号。
- 『GATE』31号。
- 『ハルハトラム』2号。
- 『コールサック』104号。

詩集

- ロバート・フロスト詩集『ニューハンプシャー』藤本雅樹訳。春風社、2020年。
- ジュリエット・コーノ『ツナミの年』牧野理英訳。小鳥遊書房、2020年。
- 生駒正朗『春と豚』。書肆山田、2020年。
- 千石英世『地図と夢』。七月堂、2021年。

その他書籍・論文・エッセイなど

- 保坂俊司編著『アジア的融和共生思想の可能性』。中央大学出版、2019年。（編著者名を訂正して再掲しています）
- 阿部公彦『理想のリスニング』。東京大学出版会、2020年。
- 竹内理矢・山本洋平編著『深まりゆくアメリカ文学』。ミネルヴァ書房、2021年。



詩誌『立彩』第19号 2021年3月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒400-8555 山梨県甲府市横根町 888

山梨英和大学人間文化学部 渡辺信二研究室 気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311